

立正大学博物館 館報

万吉だより

MA GECHI NEWS

第 27 号 平成 30(2018) 年 10 月

博物館における調査・研究

館長 時枝 務

博物館活動のなかでも、その評価が人によって異なるのは、なんといっても調査・研究である。

数年前に、文化財の活用が思い通りにならないのは学芸員のせいだといって物議を醸した政治家がいたが、彼がそのように思い込んだ背景には学芸員を公務員程度にしか評価しない博物館管理職の存在がある。ある公立の博物館長は、「うちの博物館では、学芸員が研究するような時間は与えないから、無駄がない」というような発言を公然とおこない、学芸員に研究はいらないと主張してやまなかった。それほどではないとしても、研究は学芸員にとって不必要なものという感覚は、多くの行政関係者が抱いている。学芸員の側も、博物館活動に研究が欠かせないことを承知しながらも、目立たないように研究を進めようとする者が少なくない。正論を吐いて戦うよりも、表に出ずに確実にこなすことで、実績を示すことで理解を得ようというわけである。

そうしたなかで、昭和 43 年（1968）5 月に開館した平安博物館では、学芸員の調査・研究を主軸にすえた博物館活動を展開した。それは、博物館活動の原動力が調査・研究にあることを熟知する角田文衛（1913－2008）の意見によるもので、同館では学芸員を教授・助教授・講師・助手の職階に位置づけて、調査・研究に従事しやすい体制を樹立した。角田は、自ら標榜する「古代学」者であるが、考古学のみならず古代史や古代文学に精通していた。彼は、考古資料などの博物館資料で歴史を語るためには、博物館資料を理解しているのみでなく、それを取り巻く学際的な知識が必要であることを知っていた。そうした知を手に入れるためには、さまざまな研究を幅広くおこなう必要があり、そうした努力を学芸員に期待したのである。平安博物館は、平安京と平安文化に特化した博物館であったが、考古資料や文献史料を学際的に扱った調査・研究や展示を実践したのである。残念なことに、平安博物館は、昭和 63 年に経済的な理由で閉館され、20 年の歴史に幕を下ろした。しかし、調査・研究を主軸にすえた博物館運営のあり方は、国立民族学博物館や国立歴史民俗学博物館などに継承されている。

ところで、博物館における調査・研究には、基礎的な調査・研究と博物館学的な調査・研究の二者があることは周知の通りである。基礎的な調査・研究は、博物館資料についてのもので、博物館資料そのものの調査に始まり、そこから派生するさまざまな問題に広がる。立正大学博物館の場合、梵鐘の材質や製作技法の調査・研究に始まり、梵鐘を生んだ仏教文化の研究にまで広がる。博物館学的な調査・研究は、博物館施設の調査・研究に始まり、保存・展示・教育など博物館活動の全領域に及ぶ。立正大学博物館では、いまだ博物館学的な調査・研究にまでは手が回っていないが、今後必要となる可能性が高い。そのためには、博物館資料と博物館活動に理解があり、積極的に調査・研究を推進していける人材が欠かせない。調査・研究の成果を踏まえて、斬新な展示をおこない、わかりやすい説明を主体とした教育活動を実践する必要性は、立正大学博物館のような小さな博物館でも変わらないのである。

地球環境科学部 20 周年によせて

高村弘毅（立正大学名誉教授）

1. はじめに

時に日本の各大学は競って教育環境の整備に努力していた。学生の応募も受験生が非常に多い傾向にあり、キャンパスの建設も競って行なわれていた。

地球環境科学部が創設される 20 年前には日本の生活環境も脆弱になり、大気、水質、土壌が汚染され人間や動物の生活環境を修復する必要性に駆られていた時代である。

2. 地球環境科学部の創設

このような時代のなかで、地球環境を是正するための若手の教育が自然と要求された。教育の基礎科目はその当時の日本の環境、あるいは世界の環境を加味しながら作成しなければならなかった。そのため今までに文学部地理学科の中で扱っていた分野の中から生かせる科目は活かし、新しい環境に対応する科目がいかなるものがあるかを大学内外の各専門家に意見を求めなければならなかった。とくに自然環境に関しては、東京大学の生産技術研究所の教員方や国公私立の教員にも意見を求めた。既存の大

学における科目に無いような環境問題を扱う科目の抽出には各位頭を悩ませた。

立正大学においては実験系の科目あるいは実験施設の設置が要求され、現在の品川キャンパスにおけるスペースでは新規建設は難しかった。そこで熊谷キャンパスに社会福祉学部が続いて 1 学部を増設し熊谷キャンパスの教育内容の充実を図ることも視野に入れて新学部設置を検討した。そこに至るまでには社会の状況に対応した品川キャンパスの既存学部の改組、ならびに熊谷キャンパスに設置されていた教養部の改組も含み大学全体の新しい教育組織の構築が検討された。

その際に筆者が大学の将来構想委員会に提出した 3 つの学部整理案は①経済・経営・法学部を 1 つにし社会総合学部。②文・仏教学部に新たに教養部を組み込んだ文科・学芸学部（仮称）。③地球環境を扱う文学部地理学科を基本にした理工系の学部を熊谷に設置する改組案である。

3. 学科の目標

地球環境科学部は自然地理学系が理系の環境問題を取り扱うための科目を組織し、人文科学系の地理学は社会人文科学系の環境問題を取り扱う科目を設置し教育する。学部設置当初の目標は 2 分野ともに理学系の学科としてスタートしようとしたが、予算上難しい面があった。結果的に理系と人文科学系の 2 学科が設置された。



熊谷キャンパス全景（1967年）



地球環境科学部棟（3号館）

地理学科は従来の教育伝統を守りつつ、教職方面に学生を輩出することを目標とした。現在、地理学は中・高等学校において必修化され、世界的教育を踏まえた教育指針になろうとしている。従来の地歴の状態を思いながら新しい地球環境の人文科学現象を視点に社会に対応策を提案しなければならない立場となった。また、地理学科の各教員がそれぞれの専門性を活かした野外授業を実施することも重要である。

環境システム学科においては、従来の自然地理学系のみならず理学工学の環境諸問題を取扱い、その解析、研究結果を社会に提案していかなければならない。その意味から最も科目の設定が新しい環境問題に対処する科目の組合せが重要になってくる。とくに地球環境問題（自然災害ならびに人為的災）の予測と発生原因の究明に関する科目が重要視される。近年発生している火山災害、気温の変化、降雨システムの解析、津波、風などの正確な把握と解析、結果の報告を社会に提供しなければならない。地球環境科学部の中でとくに意識した問題点はグローバルの意識を高めるための科目の設置が重要であった。

上記のことを考えると環境アセスメント、リモートセンシブル、自然・人間が原因で発生する環境問題を教育の中に浸透させることが極めて重要である。

4. 遠隔双方向授業

立正大学においては品川と熊谷の2校地に教育施設がある関係で、そこから生じる学生育成の諸問題を解決する方法が学校経営の最も大切な視点である。その意味からしてネット環境を利用した教育システ

ムが学生育成の諸問題を補う必要があった。

品川と熊谷で経済学部の石田幸造教授と地球環境科学部の筆者によって遠隔双方向授業が導入された。以降、地球環境科学部の山下倫範教授も同システムを導入している。また南極と地球環境科学部との双方向授業が過去2回実施された。

5. 今後の地球環境科学部に期待すること

「厳師出高徒、師厳道更尊」という言葉がある。厳格な師のもとからは優れた弟子が輩出され、師が厳格であればその教えはますます尊いという意味である。筆者が今後の地球環境科学部に期待することは、学生に博士論文を提出させることができるような教育を教師が行い、国際会議で教師と弟子（学生）が発表することの意気込みを期待している。

また、大学院博士課程に進学をする意欲が湧くような教育がいつそう望まれる。さらに教員においても立正大学の学生に博士号を与えるように指導をし、教員自らも学位論文を取得することが望まれる。とくに理工系においては博士・技術士などの資格を得るカリキュラムの設置が望まれる。

なお、地球環境科学部の教員においては、国際機関・会議などでの活発な発表を促進することが、学生に対する刺激となると考える。国内の諸学会においても本学出身者の発表が減少していることに寂しさを感じている。海外からの留学生の招待も国際化の1つであると考え。あえて希望するならば教員、大学院生の研究発表大会を実施して、社会にアピールする必要がある。

第 13 回企画展のお知らせ

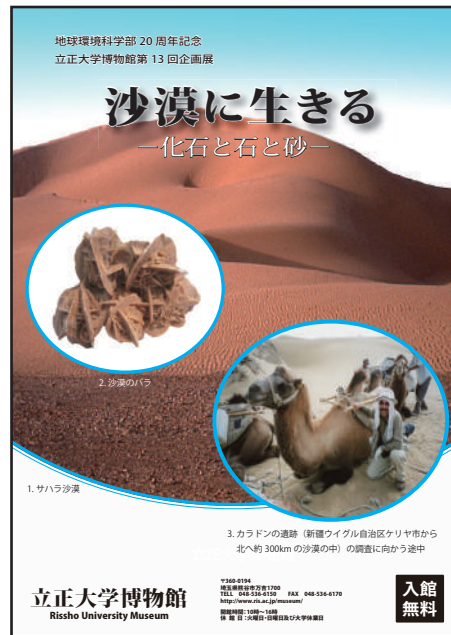
平成 30 年 10 月 22 日 (月) から 12 月 17 日 (月) を会期として、立正大学博物館第 1 展示室にて地球環境科学部 20 周年記念、第 13 回企画展『沙漠に生きる—化石と石と砂—』を開催します。

地球環境科学部が熊谷キャンパスに創設されて、今年 (平成 30 年) で 20 年を迎えます。本学部は理学系の環境システム学科と、文理融合系の地理学科で構成されています。ともにフィールドワークや環境、地域問題について実践的な授業や実習を行ない、高度な専門技術と広い視野を身につけた優秀な学生を輩出しています。

これまで多くの優れた学生を輩出してきた背景には、学部の教育活動を担う様々な分野の教員や、学生教育に尽力した職員によって成り立っています。学部創設当初は、環境システム学科で 14 名、地理学科で 10 名計 24 名の専任教員が学生の指導にあたりました。現在、その多くの教員は退職されましたが、「地球と地域の環境問題の解決に貢献できる有為な人材を養成する」という教育理念は今もなお引き継がれています。

また、教員は教育活動のほかに社会貢献や研究活動にも力を注いでいます。社会貢献では学部主催の「地球環境科学部公開講座」や、産官学連携センター主催の「デリバリーカレッジ」などの公開講座に多くの教員が出講し、さまざまな環境問題を取り上げた講義を行なってきました。

研究活動では、地球環境科学部棟 (熊谷キャンパ



第 13 回企画展

ス 3 号館) に設けられた実験室や実習室、大型分析器など研究を進めるための十分な施設や設備が整えられ研究活動に役立てられています。

今回の企画展では、学部創設に深く関わった高村弘毅先生 (第 2 代学部長) が在任中に世界各地の沙漠調査で採取した貴重な資料を、当時調査の様子を記録した写真資料とともに紹介します。

なお、本展示は平成 28 年 1 月より品川キャンパスに巡回する予定です。



ネパールのバンガンガにて



砂沙漠

地球環境科学部20周年記念
立正大学博物館第13回企画展

沙漠に生きる —化石と石と砂—

本年度、地球環境科学部は20周年を迎えます。それを記念し、立正大学博物館では学園開設から現在に至るまでの歩みと発展とともに、地球環境科学部名譽教授の高村弘毅氏よりご寄贈いただいた沙漠関連資料を紹介いたします。

| 企画展「沙漠に生きる—化石と石と砂—」展 | 講演会 |
|--------------------------|-------------------|
| 平成30年10月20日(土)～12月17日(月) | 平成30年 |
| 主な展示資料(予定) | 時 間: 費用: 無料 |
| ・学後のバウ | 講 師: 高村弘毅 申 込: 不要 |
| ・砂漠の気候 | 会 場: 立正大学熊谷キャンパス |
| ・三稜石 | |
| ・海生化石 | |
| ・ラクマカン砂漠の砂 | |

開館時間: 10時～16時
場 所: 立正大学博物館 第1展示室(1階)
入 館 料: 無 料

お問い合わせ
立正大学博物館
〒350-0184 埼玉県熊谷市万吉 1700
TEL: 048-530-6130
FAX: 048-530-6170
E-mail: museum@ris.ac.jp
HP: <http://www.ris.ac.jp/museum/index>

講師紹介
高村弘毅
立正大学名誉教授

立正大学名誉教授、立正大学学長。1962年立正大学文学部国文学科卒業。1964年立正大学文学部国文学科卒業。1966年立正大学文学部国文学科卒業。1968年立正大学文学部国文学科卒業。1970年立正大学文学部国文学科卒業。1972年立正大学文学部国文学科卒業。1974年立正大学文学部国文学科卒業。1976年立正大学文学部国文学科卒業。1978年立正大学文学部国文学科卒業。1980年立正大学文学部国文学科卒業。1982年立正大学文学部国文学科卒業。1984年立正大学文学部国文学科卒業。1986年立正大学文学部国文学科卒業。1988年立正大学文学部国文学科卒業。1990年立正大学文学部国文学科卒業。1992年立正大学文学部国文学科卒業。1994年立正大学文学部国文学科卒業。1996年立正大学文学部国文学科卒業。1998年立正大学文学部国文学科卒業。2000年立正大学文学部国文学科卒業。2002年立正大学文学部国文学科卒業。2004年立正大学文学部国文学科卒業。2006年立正大学文学部国文学科卒業。2008年立正大学文学部国文学科卒業。2010年立正大学文学部国文学科卒業。2012年立正大学文学部国文学科卒業。2014年立正大学文学部国文学科卒業。2016年立正大学文学部国文学科卒業。2018年立正大学文学部国文学科卒業。2020年立正大学文学部国文学科卒業。

アクセス

● 飯沼駅前、北砂駅前線、秩父鉄道「熊谷駅」下車、南口より立正大学バス(国慶十交通)で約10分。
● 北武蔵上線「森林公園駅」下車、北口より立正大学バス(国慶十交通)で約12分。

第 13 回企画展チラシ

NEWS

入館者数

平成30年4月1日から9月30日の6ヶ月間で、延べ111日開館し、総来館者数は431名でした。内訳は、一般の方104名、本学学生161名、本学教職員17名でした。以上の期間に熊谷キャンパスにおいてオープンキャンパスが4回行なわれました。その際の来館者数は149名でした。

資料活用

平成30年4月1日から9月30日までの期間に、当館所蔵の資料を以下の博物館等に貸出を行ないました。

①貸出資料：ティラウラコット出土資料

貸出機関：龍谷ミュージアム

貸出期間：平成30年4月21日(土)～7月5日(木)

利用目的：2018年度春季特別展「お釈迦さんワールド-ブツダになったひと-」で展示するため。

②貸出資料：吉田格氏関連写真資料

貸出機関：武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館

貸出期間：平成30年7月28日(土)～9月27日(木)

利用目的：武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館企画展「考古学への情熱～井の頭池遺跡群調査史、はじまりは御殿山から～」において、展示パネル及び図録等に使用するため。

館務実習

今年度も立正大学博物館では学芸員資格取得を希望する学生のための館務実習を受け入れました。

実習生は文学部史学科6名、文学部文学部2名、仏教学部仏教学科1名の計9名でした。

館務実習では、資料の取扱、展示や教育普及事業の立案・準備などについて学んだほか、9月から行なわれる品川キャンパス展の製作を行ないました。慣れない作業に苦労する学生もいましたが、無事に実習を終えることができました。

実習内容と担当講師は次の通りです。

お知らせ

【企画展案内】

地球環境科学部 20 周年記念

立正大学博物館 第 13 回企画展

「沙漠に生きる—化石と石と砂—」展

会期:2018年10月29日(月)から12月17日(月)

場所:立正大学博物館第1展示室

【関連講演会案内】

(講師) 高村弘毅氏(本学名誉教授)

(日時) 平成30年12月1日(土) 13時より

(場所) 立正大学熊谷キャンパス

※詳細は後日HPにて掲載します。

(料金) 無 料

※ 詳細は当館HPを御覧ください。

URL : <http://www.ris.ac.jp/museum/>



平成 30 年度 実習生

○ 8 月 6 日 (月)

文化史に関する講義と梱包実習

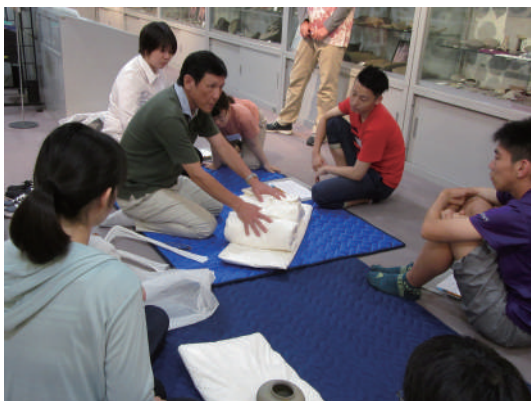
講師 井上尚明氏 (立正大学非常勤講師)

午前：文化史講義

博物館館務と資料調査に関する講義

午後：梱包実習

資料の運搬について、実際に博物館館蔵資料である土器類を使用して梱包実習を行いました。



梱包実習の様子



資料の観察をする様子

○ 8 月 7 日 (火)、8 日 (水)、11 日 (土)

展示に関する実習

講師 池田奈緒子氏 (当館非常勤学芸員)

博物館展示について講義を受けたあと、実際に品川キャンパス展のパネル作成を行ないました。9 月 6 日には品川キャンパス 9 号館エントランスにて展示作業を行いました。

○ 8 月 9 日 (木)

古文書に関する講義と実習

講師 石山秀和先氏 (文学部史学科准教授)

古文書の取扱い方や、調査方法を学び、実際に古文書と和本の調査カードを作成しました。

○ 8 月 10 日 (金)

刀剣の取扱いに関する講義と実習

講師 田嶋和久氏 (文学部社会学科准教授)

午前：刀剣に関する解説、取扱いに関する講義

午後：実際の刀剣を用いて手入れに関する実習を行ないました。

○ 8 月 13 日 (月)

自然誌に関する講義と実習

講師 北沢俊幸氏

(地球環境科学部環境システム学科准教授)

自然誌に関する講義を受けたあと、実際に標本を作製しました。



古文書実習の様子

品川キャンパス展

■ 報告

「野原古墳群」展

◆期間:平成 30 年 5 月 10 日(木)～9 月 5 日(水)

◆内容:本展示では、博物館所蔵資料紹介として野原古墳群を取り上げた。野原古墳群出土の直刀や刀子などの鉄製品や須恵器を紹介した。



野原古墳群展の様子



品川キャンパス展の様子 (1)



品川キャンパス展の様子 (2)

■ 開催中の展示

この度の品川キャンパス展示は、博物館収蔵資料の瓦に焦点をあてました。展示品は、八坂前窯跡(埼玉県入間市)・新久窯跡(埼玉県入間市)・新沼窯跡(埼玉県鳩山町)・金山窯跡(群馬県藤岡市)の発掘調査で出土した瓦や、長熊廃寺(千葉県佐倉市)・九十九坊廃寺(千葉県君津市)採集の瓦などです。これらの資料は本学考古学研究室・考古学研究会・同窓生が収集したものです。

瓦は 6 世紀末に朝鮮半島から仏教とともに日本に伝わりました。現代の都市生活において瓦は身近なものではありませんが、本展示を通して瓦の歴史の一端に触れて頂ければ幸いです。

なお本展示は、平成 30 年 8 月 7 日(火)・8 日(水)・11 日(土)に行われた博物館館務実習において、実習生と共に作製したものです。

開催期間は平成 30 年 9 月 6 日(木)～12 月 20 日(木)を予定しています。

常設展の展示入替

常設展第 2 展示室(2F)の展示入替を行ないました。平成 29 年度、文部科学省の「私立大学研究ブランディング事業」(タイプ B)に選定された「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」の活動報告を展示しています。



常設展の様子

見学者の声

当館に寄せられたご意見・ご感想をご紹介致します。今後とも、皆様の声を博物館運営や展示に反映できるよう務めてまいります。貴重なご意見・ご感想をありがとうございました。

◆仏教考古学のほか、縄文から古代の遺物が多数あり、とても良かったです。とくに仏教関係の展示は圧巻です。

(60代 男性・東京都)

◆立正大学について知ることができてよかったです。また来ます。

(20代 男性・埼玉県)

◆県内出土でも場所がよく分からないことがあるので簡単な地図をつけてくれると嬉しい。

(20代 女性・埼玉県)

◆大昔の郡の名前が現在も使われていることを知り、興味深く思いました。

(60代 女性・埼玉県)

利用案内

所在地：〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

立正大学熊谷キャンパス内

TEL 048 - 536 - 6150

FAX 048 - 536 - 6170

開館日：月・水・木・金・土曜日（大学休業中を除く）

開館時間： 10:00～16:00

※詳細につきましては、博物館ホームページをご覧ください。

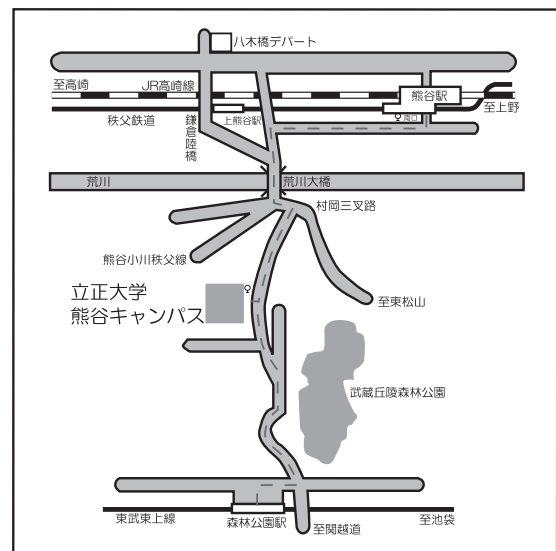
交通機関：

① JR 高崎線、北陸新幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 10 分。

② 東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 12 分。

お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課

(048-536-6010) にご連絡下さい。



あ と が き

平成 30 年度も上半期が過ぎました。館務実習では短い期間でしたが学生一人ひとりが一生懸命に品川展の準備をしている姿が印象的でした。

第 13 回企画展「沙漠に生きる - 化石と石と砂 -」展の開催につきましては、地球環境科学部の教員をはじめ、職員の方々にご尽力いただきました。深く御礼申し上げます。

立正大学博物館館報 万吉だより 第 27 号

平成 30 (2018) 年 10 月 1 日発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

TEL 048 - 536 - 6150

FAX 048 - 536 - 6170

E-mail : museum@ris.ac.jp

URL : <http://www.ris.ac.jp/museum/index>

題字揮毫 田淵 観 斎 (立正大学名誉教授)

(印刷：アサヒコミュニケーションズ)